ジョン・ダン『不意に発生する事態に関する瞑想』

試　訳（II）

湯　浅　信　之

VI. 彼は心配する

医者は恐れる

黙　想 VI

医者は私を観察するが，彼に負けないぐらい熱心に，私は彼を観察する。私は彼が恐れているのを見て，彼と共に恐れる。いや，恐怖において，彼に追い着き，彼を追い越すのである。彼の歩みは遅い。彼が恐怖を隠すので，私はいっそう恐れ，彼が恐怖を私に見せまいとするので，私はいっそう鋭くそれを見るのである。彼は彼の恐怖が彼の医術の実施と施行を脅かすものではないことを知っているが，私の恐怖が彼の医療の効果と作用を損なうのではないかと恐れている。脾臓の病気が合併症となり，身体のあらゆる病気と混合するように，恐怖は精神のあらゆる活動やあらゆる感情に介入する。また，体内に溜まったガスは他の病気と間違えられ，胆石や痛風と取り違えられるように，恐怖は精神のあらゆる病気と似た症状を示すものである。それは，愛，すなわち，物に対する愛着と見えることもあるが，実は，恐怖，すなわち，物を失うことに対する激しい危惧，深い恐怖なのである。それは危険を軽んじ，見下す勇気と見えることもあるが，実は，他人の風評や評判を過大評価し，それを失うことを恐れる恐怖なのである。獅子を恐れない者が，猫を恐れることがある。餓死するのを恐れないものが，彼の食用に出された卓上の肉の塊を恐れることがある。太鼓

や，喇叭や，鉄砲の音や，それらが掻き消そうとする兵士の断末魔の叫びを恐れない者が，ある特定の楽器の音を恐れ，敵の誰かがその楽器を演奏すれば，この勇敢な者を戦場から追い出すことができることがある。私は恐怖が何であるかを知らない。また，いま私が何を恐れているかも知らない。私は死が早まることを恐れてはいないが，私の病気が進行するのを恐れている。これを否定すれば，自然を裏切ることになる。また，もし私が死を恐れていると言えば，それは神を裏切ることになる。私の弱さは限界をもつ自然からのものである。私の強さは無限の力を持ち，それを限りなく分配される神からのものである。あらゆる寒気が全て毒気ではなく，あらゆる震えが全て麻痺ではないように，あらゆる恐怖が全て憶病ではなく，あらゆる逸脱が全て脱走ではなく，あらゆる熟慮がそのまま決定ではなく，そうでなければよいと願うことが，直ちに，そうなったときの不平や絶望ではない。私の医者の恐怖が彼の医療を妨げないように，私の恐怖も，私が精神的，社会的，道徳的援助と慰安を，神や，人や，私自身から受けることを妨げるものではないのである。

論　議 VI

私の神よ，私の神よ，あなたの書物のなかに，恐怖は息の根を止める霊，窒息させる霊であると記されている。すなわち，「イシュ・ボシェトはアブネルを恐れ，もはや言葉を返すこともできなかった」[104]と書いてある。ヨブの場合もこれと同じく，あなたに何も言えなかった時に，「わたしの上からあの方の杖を取り払ってくれるものがあるなら，その時には，あの方の怒りに脅かされることなく，恐れることなくわたしは宣言するだろう，わたしは正当に扱われていない，と」[105]とあなたについて言っている。あなたに対する恐怖が，あなたに対する信仰を奪い去ることがあってよいであろうか。あなたは私に口を開くことと，恐れることを命令され，どちらもできないようになされるのであろうか。私の神よ，あなたにはそのような二心

や，欺瞞はない筈である。あなたは私の光り，私の輝き，私の太陽，私の月光であり，繁栄と自信にあふれた昼間も，不幸と恐怖にあふれた夜中も，私を導いて下さる。そうであれば，如何なる時にも，私はあなたに向かって語りかけなければならない。では，何時私はあなたを恐れなければならないのか。これもまた時を選ばないのである。あなたに訴える祈願者を，あなたが「うるさい」と退けられたことがあっただろうか。あなたは私達に或る裁判官の説話を示された。それによると，「あのやもめは，うるさくてかなわないから」[106]彼は裁判を行ったという。しかし，あなたはこの説話の目的について，あなたが我々のしつこさに困ったことを示すためではなく，（あなたがそこで述べられたように）我々が「絶えず祈らなければならない」[107]ことを示すものであると明言されている。また，同じ目的のために，あなたはもう一つの説話も示された。それによると，「だれか友達がいて，真夜中にその人のところに行き」パンを貸すようにねだれば，「その人は，友達だからということでは起きて何にか与えるようなことはなくても，しつように頼めば，起きて来て」[108]与えるであろう。神もそれと同じ様になさる。いつ頼んでも，神はそれを「うるさい」とは言われない。真夜中に寝床の中で祈っても，明朝お前が寝床のそばに跪いて祈る時に聞こうと神は言われない。また，寝床のそばに跪いて祈る時に，日曜日に教会で聞こうと神は言われない。神は人をじらす神，意地悪な神ではない。祈りは時を問わないものである。神は寝たり，留守をすることはない。しかし，ああ，私の神よ，私は同時にあなたを恐れることができるか。如何なる所でも，如何なる時でも，あなたのところに出て，あなたに語りかけると同時に，あなたを恐れることができるか。ああ，これはなんと大胆な質問であろうか。あなたの前に出ることよりも，この質問をすることの方がもっと無謀なことである。あなたを恐れていても，私はあなたに語りかけることはできる。いや，あなたを恐れていなければ，それができないのである。我々が常にあなたを恐れるようにするために，あなたを除いては他の誰も恐れてはならぬとあなたは定められた。誰も恐れてはならぬのか。そうである。誰を恐れるのか。「主はわたしの助け，わたしの救い，わたしは誰を

恐れよう」[109]と書いてあるではないか。強い敵を恐れるのか。強い敵も恐れてはならない。あなたを恐れる者にとって敵は怖くはないのである。「そこの住民を恐れてはならない。彼らは我々の餌食にすぎない」[110]と書かれている。我々を餌食とせず，我々の餌食を奪うこともなく、敵は我々の餌食となるのである。我々が敵を恐れる理由はない。この餌食の喩えは，我々を滅ぼそうとする敵に我々が勝つことを示してはいるが，我々は文字通りに日々の食糧を欠くことを恐れるのではないか。敵を恐れずとも，飢えを恐れるのではないか。「若獅子は獲物がなくて餓えても，主に求める人には良いものの欠けることがない」[111]と書かれている。一度も餓えることはないのか。今は良くても，悪くなることを恐れなくてはならないのではないか。「災いのふりかかる日，どうして恐れることがあろうか」[112]とあなたの僕のダビデは言っている。彼自身の罪が災いの日をもたらしたのであるが，彼はそれを恐れなかった。災いの日が死で終わろうともか。その通り。たとえ，死が暴力や，悪意や，我々の罪によるものであっても，若し神を恐れているのであれば，「死の宣告を恐れるな」[113]である。ああ，私の神よ，あなたを恐れる我々が他の者を恐れるのを許さないために，あなたは他の者が我々を恐れるように仕向けられた。「ヘロデが，ヨハネは正しい聖なる人であることを知って，彼を恐れ，保護した」[114]とあるように。ああ、私のあり余る神よ，あなたはなんと完全に，ああ，私の穏やかで寛大な神よ，あなたはなんと優しく，恐怖について私が考える時に起こる疑惑の糸を解きほどいて下さることか。「主を畏れる人に，主は契約の奥義をさとらせてくださる」[115]と言われた時に，あなたが意図されたものは，恐怖の正しい用法という秘密・奥義だったのではなかったのか。我々は「主を畏れることを悟る」[116]と言われた時に，あなたが伝えようとされたことは，恐怖を持ちそれから利益を得よ，恐怖を持ちその下に立て，恐怖から導きを受けそれに負けるな，ということではなかったのか。また，「ユダヤの教会は主を畏れて歩んだ」[117]と言われた時に，あなたはその教会を手本に選ばれたのではないか。彼等は恐怖を持ってはいたが，そのために腰を下ろして怠けたり，弱々しく倒れたり，恐怖の重圧に負けたりはしなかった。神への奉仕

を弱めるような恐怖もある。「恐ろしくなり，隠れております。わたしは裸でするから」[118]とアダムは言った。あなたを捨てた者は、他のすべての者の餌食となる。彼等は恐れるべき理由を持っている。彼等が「恐怖に襲われる時，嘲笑うであろう」[119]とあなたは一度ならず言われた。また，「大いに恐れるがよい，恐れることもなかったものよ」[120]とあなたは一度ならず言われた。恐怖のなかには，以前の罪の罰となるもの，更に多くの罪を招くものもある。例えば，あなたの御子であるイエス・キリストについて，「良い人だと言う者もいたが，ユダヤ人たちを恐れて，イエスについて公然と語る者はいなかった」[121]のである。ヨセフはキリストの弟子であったが，「ユダヤ人たちを恐れて，そのことを隠していた」[122]のである。また，「弟子たちはユダヤ人を恐れて，家の戸に鍵をかけて」[123]集会を開いたのである。ああ，私の神よ，我々があらゆる天候に耐えることができるように，安定を保つバラストとして，あなたは恐怖を我々に与えられた。しかし，そのバラストの砂の中にあなたは純金を混ぜられた。すなわち，あなたを畏れる恐怖を混ぜられたのである。「主を畏れることは宝である」[124]と書かれているからである。主への畏れを持つ者は，人が持つことのできるもの，神が与えることのできるもの，全てを備えていると言えよう。憶病な者をあなたは叱られる。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」[125]とあなたは言われた。憶病な者をあなたは軽蔑をもってあなたへの奉仕から退けられる。ギデオンの軍勢からは「二万二千人が帰り，一万人が残った」[126]に過ぎない。憶病な者をあなたは解雇されるだけではない。さらに，此の世から二度と帰ることのできない処に追いやられる。「おくびょうな者，不信仰な者，このような者たちに対する報いは，火と硫黄の燃える池である。それが，第二の死である」[127]と書かれている。恐怖もあれば，希望もある，しかし，いずれもあなたにとっては忌み嫌うべきものである。彼等は「望みをかけてくるが，裏切られる」[128]とあなたの僕であるヨブは言っている。なぜなら，彼等は希望を置き違え，間違った方向に向けたからである。彼等は希望を抱いたが，あなたに希望を寄せたのではなかった。その結果，彼等は恐怖を持つことになるが，あなたを畏れるのではない。しかし，私の神・

私の恐怖よ，そして，私の神・私の希望よ，あなたに対する恐怖の中には，希望と愛と確信と平和と，そして，幸福のあらゆる要素・成分が含まれている。喜びは全てを包含し，恐怖と喜びは共存する。いや，両者は同一なのである。キリストの墓から立ち去った婦人たち，番外の使徒，使徒の使徒となった婦人たち，教会の母たち，さらには教会の教父，教祖父，使徒たちの母ともなった婦人たち，復活の天使とも言える婦人たちは，「恐れながらも大いに喜び，急いで墓を立ち去り，走って行った」[129]と聖書に書いてある。彼女たちは，恐れと喜びという二本足で走ったのである。しかも，両足はともに健全であった。ああ，主よ，あなたを畏れる者は，あなたに喜びを見出す。あなたに喜びを見出す者は，あなただけを畏れるのである。あなたに対する畏れと愛は，不可分である。聖書のいたるところで[130]我々は神を畏れるように命ぜられている。しかし，すべての基となるべき教えは，「あなたの神である主を愛しなさい」[131]である。あなたを畏れるか愛するか，どちらかをしない人は，どちらもしない人である。どちらかをする人は，どちらもする人である。それ故に，あなたの僕であるダビデが「主を畏れることは知恵の初め」[132]と言い，その子ソロモンが繰り返してそれを言ったのである。その両方をまとめた人は，「主を畏れることは，知恵の根源」[133]であると言い，また，全てを包含するように，「神を畏れることは知恵である」[134]と言ったのである。従って，賢い者は必ず恐怖をもち，必ずそれを正しく用いるものである。あなたはモーゼをあなたの民に送られたが，それは「彼らが地上に生きる限り，わたしを畏れることを学ぶ」[135]ためであった。重苦しい災難の日々だけでなく，幸福に恵まれた楽しい日々においても，あなたを畏れることを学ぶためである。ノアは救われる保証を与えられていたのに，「恐れかしこみながら，自分の家族を救うために箱舟を造った」[136]のである。「知恵ある人は，すべてに用心深い」[137]ものである。私は他の点では知恵があるとは思わないが、この病は単に自然のもたらした偶然ではなく，あななたが直接与えられた懲らしめであり，「生ける神の手に落ちるのは，恐ろしいこと」[138]であるから，この病気は恐ろしいものであるという恐怖を持ち，あなたを畏れているという点では，豊かな知恵を

与えられていると思うのである。また，あなたの御手が私にかけられている以上，あなたが私をその御手から落とすことはないので，自然の病弱さから生じる極端な恐怖から，あなたを恐れるこの恐怖が私を守ってくれることを知っている点でも，豊かな知恵を与えられていると思うのである。

祈　禱 VI

ああ，最も力強い神よ，憐み深い神よ，真の悲しみと真の喜び，そして，全ての恐怖と全ての希望の神よ，あなたは私に再び悔悟する必要のない悔悟を与えて下さったのであるから，同様に，決して恐れる必要のない恐怖を私に与えて下さい。優しい，しなやかな，穏やかな心を私に与えて下さい。そして，喜ぶ人と共に喜び，悲しむ人と共に悲しむように，恐れる人と共に恐れることができるようにして下さい。また，私の病気における助け人として送られた医者の恐怖の中に，私の病気には危険があることを明らかにされたのであるから，主よ，どうか私がその恐怖を克服することに忙しく，恐れられる最悪の事態である此の世との別れに対する用意・支度を怠ることがないようにして下さい。祝福を受けた殉教者の多くは，何の恐怖も見せずに此の世を去ったが，あなたの御子はそうではなかった。殉教者たちは人間であるから，あなたは彼等にあなたの霊と力を与えて，人間以上のことを行わせたのである。あなたの御子は，あなたによっても，彼自身によっても，神であると宣言されているから，逆に人間であることを明らかにする必要があった。そこで彼は人間の弱さを見せたのである。そうであるから，ああ，私の神よ，私がこれらの恐怖を恥ずかしいと思うことなく，これらの恐怖を感じることによって，キリストの場合と同様に，直ちに全てをあなたの御心に委ねる決意ができるようにして下さい。そうして，私の以前の冷淡さと不信仰をこの病気の熱で焼き，溶かし，私の以前の情火をこの病気の汗の洪水で消し，私の以前の傲慢と怠惰をこれらの恐怖で矯正した後は，ああ，主よ，あなたによってそうなった以上，私は

あなたに相応しい者であると確信できるようにして下さい。そうして，あなたがこの肉体，この衣装を，此の世で更に擦り減らすために用いることを選ばれるにせよ，あの世で使うために共通の衣装櫃である墓に仕舞うことを選ばれるにせよ，その選択によってあなたが直ちに栄光を受けられるように，また，その時が来れば，あなたが復活にあずかるように定められた人々のために我々の救い主・御子イエス・キリストが買い取られた栄光によって，この肉体を飾って下さるように。アーメン。

VII. 彼は仲間に参加を求める

医者は同僚の協力を要する

黙　想 VII

恐怖が大きくなるのは，原因が大きくなるからである。医者が同僚の助けを望むのは，責任が重くなったからである。病気が成長したのである。しかし，凋落の秋もあるはずである。果たしてそれが病気の秋になるのか，私自身の秋になるのか，それは私の選ぶことではない。しかし，もしも私の秋になれば，それは病気の秋でもある。病気は私より長生きはできないが，私は病気よりも長く生きることもできる。ともかく，医者が人の助けを借りることを望むということは，彼の誠実と慧眼を示すものである。危険が大きければ，彼のやり方は正しいものと評価されるであろうし，証人を呼ぶ人は何も隠蔽することがないのである。また，もし危険がそれほど大きくない場合は，彼は野心のない人ということになる。自分一人で始めた仕事の成果と，それに対する感謝を，喜んで外の人と分かち合おうとするからである。君主がその責任の一部を他の人に委ねても，彼の権威が損なわれたことにはならない。神は多くの太陽を造らなかったが，太陽の光を受け，反射する多くの天体を造った。ローマ人たちは初め一人の王を頂

いたが，次には二人の執政官を頂き，そして末期においては再び一人の独裁官に戻った。支配者が一人であろうと，多数であろうと，あらゆる国の主権というものに変わりはない。医者が複数になったからといって，病気の危険がそれだけ増えるのではなく，治療の手筈がそれだけ整うだけのことである。国家の場合も，その仕事を多くの人が評議して遂行した方が，たとえどんなに優れた人であっても，一人の胸に納めておくよりは良いのである。病気も互いに相談し，増殖し，助け合い，悪化するものである。そうであれば，我々も複数の医者を呼び，相談してもらうのが良いことではないか。老人の前に立つとき，死はその姿を現して，名乗るものであるが，若者の背後に迫る時には，無言である。老人は病気にかかるが，若者は待ち伏せを受けるのである。従って，我々は多くの医者を必要とし，見張りをさせ，いかなる病気も見逃さぬようにしてもらわねばならぬ。森羅万象のうち，今日までに人を殺したことのないものはほとんどないと言ってよかろう。毛髪や羽毛だって人を殺したことがある。それどころか，死を防ぐ最高の解毒剤ですら人を殺したことがある。最高の強心剤が恐ろしい毒となったこともある。喜びが原因で死んだ者もいるが，彼等は笑いながら死んだので，それを見た友人たちは涙を流すことができなかった。かの暴君ディオニュシオス[139]（例の晩年にひどく苦しんだ男だと思うが）は，王座から転げ落ちて一介の私人になったときの悲しみでは死ねなかったが，劇場で人々から優れた詩人であると宣言されたときには，そんなつまらない喜びのために死んでしまったのである。人間は僅かなもので生きて行けるとよく言われるが，それよりもっと僅かなことで人間は死ぬことができる。だから多くの人の助けを借りるほど良いのである。重要な訴訟の聴聞を受ける時に，たった一人の弁護士を連れて出かける者はあるまい。自分の葬式に何の利害も持たないから，我々はそれについて勧告したり，命令することはできない。ある国民たち（とりわけエジプト人）は，死後長く住むと考えて，家よりも立派な墓をたてた。しかし，我が国にあっては，最も見えを張った伊達男の征服王[140]ですら，魂が去るやいなや，亡骸を葬る者もなく，墓すらもなく，打ち捨てられたのである。死後になって

誰が我々を守ってくれるかは分からない。だから生きている間に，できるだけ多くの人の助けを受けようではないか。一人，また一人，医者が加わるのは，一つ，また一つ，死の兆し，徴候が加わるのではなく，命を守る助け人が一人，また一人加わることである。医者たちは危険の予測で我々の空想を掻き立てるのではなく，我々を楽にして，我々の分別を深めてくれるのである。一人が学問を，一人が勤勉を，一人が信仰をもたらすのではなく，全ての人が全てのものを持って来て欲しいのである。一つの処方箋に多くの薬が入るように，多くの人が一つの処方箋を書いて欲しいのである。しかし，困った時に多くの助けを与えられることについて，私は一体何故このように長々と黙想を続けるのであろうか。黙想はそれとは反対の方向，すなわち，助けを得たくても得ることのできない人に，同情と慰めを与える方向に進まなくてはならないのではないか。なんと多くの人が，私よりも（恐らく）重い病気にかかり，家の（その一遇が家と言えるものかは知らぬが）哀れな藁に伏して，生きていても何の昇進も与えられないように，死んでも何の助けも与えられずにいることか。彼等は死んでも役人になることはないが，生きていても医者に会うこともないのである。彼等が最初に会う墓堀の下男は彼等を忘却に葬るのである。彼等は死亡者一覧の死人の数には加わるが，自ら甦って『命の書』の中に彼等の名前を見出すまで，我々がそれを耳にすることはないのである。また，なんと多くの人が，私よりも（恐らく）重い病気にかかって，病院に入れられ，（まるで砂浜に残された魚が，潮を待つように）医者の往診の時間を待っていることか。それなのに，彼等は医者の短い訪問を受けるだけである。また，なんと多くの人が，私よりも（恐らく）重い病気にかかり，彼等を収容する病院もなく，彼等を寝かせる藁もなく，墓石を枕に，通りかかりの人の耳や目に悶々と訴えるけるども，人々の心は彼等の寝床よりも，通りの石よりも硬いことか。彼等は我々のように薬の味を知ることはなく，絶食するだけてある。彼等にとっては，まずい粥が解熱剤となり，我々の召使の残飯が解毒剤となり，我々の台所の調理台の削りかすが強心剤となったことであろう。ああ，我が魂よ，多くの助け人を与えて下さった神の溢れる

御恵みに感謝することを忘れるほど眠りこけているのであれば，どれほど多くの人々が助け人を欠いでいるかを思い出して，彼等が助け人を得られるように，また，劣らず必要としている他の様々なものを得られるように，彼等に援助の手を差し伸べるがよい。

論　議 VII

私の神よ，私の神よ，祝福されたあなたの僕であるアウグスティヌスは，モーゼがやって来て，『創世記』のいくつかの個所について彼の意図を説明してくれることをあなたに願った。[141]ダビデがヨアブの軍勢から知らせを待っていたとき，見張りの者が一人で走って来るものがいますと報告すると，その状況から，一人だけならば良い知らせをもたらすだろうと彼が判断したのは何故か，私もかの書を記した人の魂に尋ねることをお許し頂きたいと思っている。[142]私には文法も，言葉の意味も，すなわち，良い知らせという意味で常に認められていることも分かるのであるが，[143]どうしても何故一人だけならば良い知らせなのか，ダビデはどうしてそう思い，納得したのか，その論理と修辞が理解できないのである。大人数でやって来れば，援軍を求め，せがむためであるから，危険があることを示すというのであろうか。それはさて置き，あなたの使徒が，「ルカだけがわたしのところにいます。ルカだけで，ルカの他には誰もいません」[144]と言うとき，不満と悲しみが宿っていることには間違いあるまい。使徒パウロが精を出している大いなる建設を助けるルカの能力，熱意，持久力，忍耐力には不安はなくても，ルカを除いて誰も助けるものがいないのを悲しんだのである。ルカは医者であったと言われている。そうであれば，この話を応用して，一人の良い医者がいるところでは，さらに多くの医者がいることが望ましいと言うことはたやすいであろう。モーセの義父がモーセを説いて政治と司法の重責を他の人と分かち，その助けを借りるようにしたのは，政策と秩序を重んじる気持ちからだけではない。[145]また，モーセが七十人の長老

をあなたの前に集めるように仕向け，彼等にモーセだけに授けられていた霊の一部を取って授け，民を治める助けをさせたのは，ああ，私の神よ，他ならぬあなたの霊であった。[146]モーセだけが人並み優れた資質をもってはいたが，あなたは彼に他の人の助けを与えられたのである。ああ，私の神よ，あなたが多くの天使を使って多くの御業をなされたのは，あなたの豊な恵みの証であると私は思う。御子について，「神の天使たちは皆，彼を礼拝せよ」とあなたは言われた。[147]もし，それが天国のことであれば，この地上においては，「十二軍団の天使を」指揮することができると，御子は言っておられる。[148]そして，天と地が一つになる最後の日には，ああ，神よ，あなたの御子は「栄光に輝いて天使たちを皆従えて」来られるのである。[149]羊飼たちに御子の誕生を知らせた天使も，[150]マリアたちに御子の復活を告げた天使も，[151]複数であった。天使は天使と群れをなすのである。ヤコブの梯子を登ったり下ったりして，天と地，あなたと我々とを結んだ天使，[152]どの道においても我々を導く責任と，任務を与えられている天使，[153]ロトを急き立て，そうすることにより我々をも危険な場所や誘惑から救った天使，[154]この地上の教会において我々を教え，司る責務を与えられた天使，[155]神に従わない者，神を受けつけない者を罰するために遣わされる天使，[156]我々が教会という畑で実りの秋を迎えたとき最後の審判の日に刈り入れ人として我々を収穫する天使，[157]我々の魂をラザロが連れていかれた国に連れて行く天使，[158]新しいエルサレムの門をそれぞれ守り，我々を迎え入れてくれる天使，[159]これらの天使は全て残らずあなたの僕たちを助けるものであり，複数の天使である。どんな働きをするにもせよ，天使は天使と共に働くものである。一人の天使の力は，一晩にセンナケリブの軍勢のうち二十万人近くのものを倒した天使の例で明らかであるが，[160]普通あなたは多くの天使を用いられる。それは丁度一人の福音書記者でも人を救う力を十分に備えてはいるが，それでもあなたが四人の福音書記者を用いられたのと同じことである。あなたの御子は，「福音を告げ知らせるために，主がわたしに油を注がれた」[161]と言われているが，それにもかかわらず，多くの聖なる者たちを「奉仕の業に適した者とされ」完成されたのである。[162]あな

たは御子を我々の魂の主教とされたが,[163]他にも主教はいる。御子は聖霊を遣わされるが,[164]他にも聖霊を遣わした者はいる。ああ，私の神よ，あなたの道は（ああ，私の神よ，あなたはあなた自身の道を歩かれるのを愛される，それは大きな道だからである）あなたの道は初めからあなたの助けを倍加することであった。従って，私の肉体の健康のためにいま私に与えて下さる多くの助けを，もしも，私が拒むならば，それは恩を仇で返すようなものであろう。あなたは，今も，これから先も，変わらぬ助けを私に与える意志を持ち，その印として，保証として，私に助けを与えて下さっているからである。あなたの偉大なる助け，すなわち，御言葉について言えば，私はそれを隠れた隅っこから，秘密の集会から，分派的個人からではなく，あなたの普遍的な教会の集いと交わりから，またそのような教会にあなたが常に備えられる人々から，求めたいと願っている。また，あなたの御言葉とあなたの聖餐は一つであり，あなたの御璽と特許状は一つであり，あなたの聖餐においては，形象とそれによって表されるもの，すなわち，パンと御子の身体は一つであると考えたいと思っている。そう考えて初めて，私は両者を同時に受けることができるのであり，また，（祝福されたあなたの僕であるアウグスティヌスが言っているように[165]）そうすることによって初めて，私はあなたの最も祝福された御子の箱船・墓碑・墓石になることができるのである。このような心構えで聖餐を受けて初めて，御子と，御子の死によってもたらされた価値あるものが私のなかに宿り，此の世において私に新しい生命を与え，あの世における私の不滅の救いを約束するのである。

祈　禱 VII

永遠の最も恵み深い神よ，あなたは砂漠にいたあなたの僕たちにマナを与えられた。マナはこの上なく美味でだれの口にもあうように造られた食べ物であった。[166]私を正すために私に与えられたこの病は，私の日々の食

べ物の一部であると信じているから，どうかその味を，私の意志ではなく，あなたの意志によって定め，私にとって美味であるように，あなたの御心にかなうようにして下さい。あなたは私の病の味は屈辱であると定められたが，同時に，慰めの味も加えられた。私の病には危険の味があるが，同時に，安心の味もある。我々の肉体を構成する四つの元素に，あなたはそれぞれ二つの性質を与えられた。火は乾燥するだけでなく，加熱する力を持ち，水は湿気を与えるだけでなく，冷却する力を持つ。ああ，主よ，病の苦しみは，我々の再生をもたらす元素であり，我々の魂はそれによってあなたのものとなるのであるから，どうか，それに二つの性質，二つの働きを与えて下さい。病の苦しみが我々を罰するだけでなく，罰を受けることによって我々があなたの道に立ち返ることができるように，我々自身は無であると悟るだけではなく，あなたが我々にとって全てであると知ることができるようにして下さい。ああ，主よ，いま私が置かれたこの特定の状況のなかで，(しかし，あなたの定められることは，単なる状況ではなく，あなたの我々に対する好意の表れに他ならないが)，この特定の状況のなかで，あなたが私を助けるために送られた人が，自ら他の人の助けを求めることによって，人はあっという間に人の助けの及ばないところに行ってしまうものであることをあなたが私にお示し下さったのであれば，同様に，どんな病の苦しみも，どんな悪魔の誘惑も，どんな罪の汚れも，どんな死の牢獄も，この最初の牢獄である病の床も，もう一つの牢獄である狭苦しい暗い墓も，あなたが私に固く約束された不変の好意から私を引き離すことはないと，私に悟らせて下さい。この罰として与えられた苦しみが，偶発的なもの，無意味なものであると考えるようなことがないようにして下さい。もし，私が或る言語で，それは天罰であると読んだのであれば，直ちに別の言語で，それは神の恵みであると読むことができるようにして下さい。果たしてそのどちらが原文であり，どちらが翻訳であるか，すなわち，恵みと天罰のいずれが私の病の原義的・根源的な意味であるか，それは私には分からない。私に分かることは，死が私に終止符を打つことだけである。確かに私の病は天罰であるように思える。しかし，私が死んであ

なたに立ち返り，その死によって，私のために死んだキリストと一つになることができるのであれば，これほど強力なあなたの恵みの論拠はないであろう。

Ⅷ　そして陛下は自分のものを遣わされる

王様は自分の医師をよこされる

黙　　想　Ⅷ

人間は一つの世界であるということについて黙想をするたびに，我々は新しい発見をする。人間が世界であるならば，人は陸地であり，不幸は海である。彼の不幸は，(不幸は彼のものであり，彼自身のもである。此の世の幸福を，彼はは小作人のように借りているだけであるが，不幸は自由農民のように所有している。幸福に対して人は単なる耕作人・使用者でしかないが，不幸に対しては人は地主･所有者である)，彼の不幸は海のように膨れあがり，陸地である人間の最も奥深いところまで到達する。人間はもともと砂であるが，涙によって固められ，練られて土となった。人間の材質は土であり，形相は不幸である。人間という此の世にあって，最も高い土地，突き出た山は王侯であるが，彼等とて海を測り，私の不幸はこれ位のものだと言えるだけの紐と鉛を持っているであろうか。どんな不幸も病の不幸には及ぶまい。王侯も最も身分の低い家臣と同様に病にかかる。グラスに王様の顔が刻まれていても，それだけ割れなくなるわけではあるまい。たとえ王様が神の代理であっても，それだけ脆くないわけではあるまい。王様はたえず身の回りに医者を持っている。ということは，たえず病気，最も悪い病気を持ち，それを恐れていることになる。王様は神であろうか。そうであると言っても甘言にはなるまい。王様は神である。しかし，病める神である。神様は病気によく似た様々な人間的感情を示されると言

われ，怒れる神，[167]心を痛める神，[168]疲れ果てた神，[169]もだえる神，[170]と呼ばれたことはあるが，病める神と呼ばれたことは一度もない。神が病にかかるのであれば，人間のように，また，我々の神々と同様に，神も死ぬことになる。異邦人たちの神々について最悪の非難・悪口は，寝ているに違いないと言うことである。[171]しかし，眠れないほどに病める神々がいれば，もっと重病である。王様は神であり，なお医者を必要とするのか。ユピテルであるのに，なおアィスクラピオスを必要とするのか。[172]腹を立て過ぎるといけないので，肝汁を抑える大黄を必要とし，うたた寝をしなように，粘液を抑えるハラタケを必要とするのか。テルトゥリアヌスがエジプトの神々と植物・薬草について，それらを庭で育てた人間に神々は恩義を受けていると言っているが，[173]それと同様に，我々の神である王様についても，彼等の永遠の存在（と言っても，わずかに七十年の存在）は薬局のお陰であって，彼等の比喩的な神性の故ではないと言えるであろう。しかし，王様の神性は，その誇りよりも，その謙遜さに現れるものである。神のように，良い行いであまねく此の世を満たし，溢れるようにするときには，また，神のように，人々の必要に応じて，そのあり余る財宝を分かち与えるときには，王様は神様となる。自分の健康を理解して大事にしない者，また，自分の健康に楽しみと喜びを見出さない者は，健康であるとは言えない。健康の喜びを持っている者は，自分の幸福と喜びをもたらしたものを，他の人にも分配し，蔓延させたいと願うであろう。誰でも自分の幸福の証しを好むからである。最高の証しは体験による証しである。我々を幸福にすることができるのは，自ら幸福を味わった者である。それ故に，自分の名誉，財宝，そして（できることなら）健康を，それらを必要としている人達に分かち与えて初めて，王様は自分の幸福を完全無欠なものとすることができるのである。

論　議 VIII

私の神よ，私の神よ，かの知恵のある者が私に警告して，「金持ちが話すと，皆静かになり，その話したことを雲の上まで持ち上げる。貧乏人が話すと，『こいつは何者だ』と言い，彼がつまずけば，これ幸いと引き倒す」と言っている。[174]従って，私が敢えて王のことに口出しをすれば，私の言葉は馬鹿にされ，私の過ちは拡大されるであろう。しかし，私の神よ，あなたはそうなさらないであろう。何故ならば，私はあなたの中にいる王と，王の中にいるあなたについて話しているからである。確かに，あなたの代理である王について，不遜・不敬に語る者は，あなたについても，不遜・不敬に語る道を開くものである。アウグストスだけではなくネロにも，ヴェスパシアヌスだけではなくユリアヌスにも，あなたは王国を与えられたからである。[175]王はその心に宿ったあなたの第一の姿を汚すことはできるが，王の権威の中に消えないように刻まれたあなたの第二の姿は，何人も汚すことはできない。ああ，神よ，あなたは知っておられる。もし，私の主君であり，あなたの道具である王様が示された私に対するあなたの恵みを讃えることを怠るようなことがあれば，忠誠に関して犯した多くの他の罪に加えて，恩知らずという最悪の咎めを，私が受けねばならないことを知っておられる。それは正に悪人になることである。何かある一つのことをしくじった罪は，我々の人間性を破壊する罪に比べて軽い。悪い家臣であることよりは，悪人であることの方が更に悪いことである。悪人は普遍的な悪性を持っていて，いつでも悪を流し，どんな形，どんな種類にでも変え，どんな働きでも与えることができるのである。従って，あなたの御子が銀貨についてなさったように，[176]私は王様を見て，誰の肖像と刻銘を持っているかを問う。王様はあなたの肖像と刻銘を持っているのである。私はあなたのものはあなたに返し，王様の幸福をあなたに願う。王様があなたから受けている恵みに感謝し，それがいつまでも続き，さらに大きくなるように祈る。しかし，私の神よ，私はここで止まって考えてみたい。私の言ったことは手管，陰謀とみられ，私が他の人よりも王様の特別の考

慮を受けているという風評を世間に立たせはしないだろうか。私は謙遜と感謝を装って，必要以上に自分を誇大視してはいないだろうか。私に対するこのような嫉妬にもかかわらず，神よ，私は積極的に王様によって私に示されたあなたの恵みを讃えたいと思う。私の肉体的健康を助けるために，いま王様がして下さったことは，私が他の多くの人と共有しているものである。他の大変多くの人が王様のそのような愛情の表現を味わったことがあるはずである。王様は自分の手で人に健康を与えることができるときには，進んでそうなさる。しかも，昔の王様の誰よりも多くの人にそうなさる。従って，王様だけが直せるような一つの病気を，神は彼のために用意された。[177]もっとも，それは一つの称号，一つの権限だけで，また，一人の王としてだけで，直せるものではない。しかし，その種の助けを必要としない者，従って，そのような助けを王自らの手から得られない者には，王様は自分の医者を送ることによって，健康の寄進をされる。フランスの聖ルイ王とイギリスの女王モードは，病院を訪ね，最も汚れた病気の場合ですら，治療の手助けをしたことで有名である。[178]また，かのテオドシウス一世のお后であった信仰の厚いプラキラは，自ら病人を助けることは余りにも身を落とすことになる，女王としては救助の手を差し延べれば十分であると言われたとき，女王の資格では救済の手を差し延べるだけにするが，キリスト教徒の資格では，すなわち，御子の身体である教会の一員としては，他の人と共に自ら病人を訪ねると言った。[179]同様にあなたの僕のダビデは同胞に接し，自分は同胞の一員であると考え，同胞を「わたしの兄弟，わたしの骨肉」と呼び，彼等があなたの御手により罰せられた時には，自分を捨てて彼等のために祈り，「罪を犯したのはわたしです。この羊の群れが何をしたのでしょうか。どうか御手がわたしとわたしの父の家に下りますように」とあなたに懇願した。[180]与えることは王のなすべきことである。アラウナがダビデにあの偉大な気前のよい贈物，すなわち，犠牲と，犠牲を捧げるのに必要な物と場所を提供したとき，彼はあなたの御霊によって「何もかも王として王に提供した」と言われている。[181]与えることは王の状態に近付くことであるが，健康を与えることは，王の王，すなわち，あな

たに近付くことである。しかし，ああ，神よ，あなたは知っておられる。また，あなたに使える高潔な僕の何人かは知っている，私の王様が私の健康を助けて下さることは，以前王様を通してあなたが私に光り輝かれたあの日の黄昏にすぎないことを。また，そのとき王様を通してあなたが私に語りかけらたあなたの声の木霊にすぎないことを。そのとき王様は誰よりも早く，私があなたの教会のために役立つのではないかという希望を抱き，私がその天職を受け入れるように敢えて教示され，説得され，懇望された。そのような願いを王様の心に与えられたあなたは，その願いに従うべきであるという気持ちを私に与えられた。それまで私は目まぐるしい渦巻きの中で病み，優柔不断にどのように生きるべきか迷っていたが，神の人，人の神である王様のお陰で，池の淀みに沈み，我を取り戻すことができた。[182] 私が石を求めた時に，彼はパンを与え，蝎を求めた時に，魚を与えたのである。[183]すなわち，私が世俗的な役職を希望した時に，彼はそれを嫌ったり，拒んだりはしなかったけれども，むしろこの天職に就くことが望ましいと考えていることを，私に悟らせたのである。これらのことを，恵み主の王様は忘れておられるかも知れないが，ああ，神よ，何事も忘れられることのないあなたは，忘れてはおられない。我々のヨシャファトは，[184]裁判官だけだなく聖職者を任命する役目を持ち，肉体的健康を助ける医者だけでなく，精神的健康を助ける医者を送る責務があるということを，身をもって明らかにする証人，それが私なのである。

祈　禱 VIII

ああ，永遠の最も恵み深い神よ，完全な喜びと完全な栄光というあなたの宝を，あなたはご自身の手で私達にわたそうと大事にとって置かれている。我々が天国においてあなたを目の当たりに見て，あなたが我々を知っておられるごとく，我々があなたを知ることができるようになると，我々は瞬時に，かつ永遠に，我々の幸福をもたらすもの全てを持つことになる

のである。しかし，此の世においても，あなたはその完全な支払の手付金を与えて，それによって我々があなたの宝の評価をある程度できるように計っておられる。ああ，神よ，私はへりくだった心と感謝の気持ちをもって，此の世におけるあなたの恵みの特質を，その恵みを私にもたらすためにあなたが用いられる道具の特質によって知るように，あなたの祝福に満ちた霊が私に教えていることを認める。此の世においては鏡におぼろに映ったあなたを見ているに過ぎないように，[185]我々は此の世においては反射によって，すなわち，道具を通してあなたの恵みを受けている。偶発的なものでさえ，あなたからやって来る。我々が運命と呼ぶものは，天国では別の名前をもっている。自然は手を差し延べて，我々に麦，酒，油，乳などを与えてくれるが，自然の手を満たしたのはあなたであり，あなたが彼女の手を開いて，我々の上に恵みの雨を降らせるのである。勤勉はその手を差し延べて，我々と，我々の子孫に，労働の賜物を与えてくれるが，彼女が種を蒔き，水をやる時に，その手を導くのはあなたの手であり，成長させて下さるのはあなたである。[186]友達は手を差し延べて，我々の出世を助けてくれるが，我々を支えるその手を支えているのはあなたの手である。ああ，神よ，これらの全ての道具から私はあなたの祝福を受けたが，その最も偉大なるものの故に，最もあなたの御名を讃美する。それは，あなたの御手から個人的な祝福を受け，かつ，公的な祝福にもあずかった一人である私が，我々の上に置かれたあなたの正しい御手，力強い御手によって，あなたの福音を聞く者になっただけでなく，それを説く説教者にもなる祝福を与えられたことである。慎んで私はあなたにお願いします。どうか，今までと同じ手段，道具によって，すなわち，同じ太陽と月光，同じ自然と勤勉によって，これまで通りに此の世にあなたの恵みを与え続けて下さると共に，同じ御手によって，この国家，この教会に恵みをいつまでも与え続けて下さい。そして，あなたの御子が雲に乗って来られる時に，[187]王様も，皇太子も，また，その子孫も，あなたが彼等に豊かに貸しあたえた能力の忠実な管理と運用について正しい勘定を差し出して，あなたの裁きを受ける用意ができているようにして下さい。[188]ああ，神よ，私の王様が

肉体的に病み，精神的に苦しみ，心に深い悲しみを感じる時には，どうか彼のために，天で最も偉大な力をもったあなたらしい医者になって下さい。いま彼が私のために，肉体的にも，精神的にも，地上で最も偉大な人らしい医者になって下さったように。

IX　彼等は薬を処方する

医者は協議して，処方箋を書く

黙　　想　IX

医者たちは私を見診し，聴診し，病床で尋問し，確証を得た。私は自分を自ら解剖し，切開して見せた。医者はいまその結果を合議するために退出した。衰退と破壊は，何と複雑多岐なものであろうか。いや，なんと手に負えない化け物であろうか。神はダビデに三種類の破壊を与えた，すなわち，戦争と，飢餓と，疫病である。[189]サタンはそれらをそのままにして，新たに，天から火を，荒れ野から大風を持ち込んだ。[190]かりに病気だけが破壊をもたらすとしても，医学に精通した学者達ですら，病気を数えることも，その名前を言うこともできないことを我々は知っている。我々の器官とその機能を犯すものは全て病気である。肋膜炎のように，犯された場所から付けられた名前だけでは，病気には不十分である。転倒病（癲癇）のように，病気のもたらす結果から付けられた名前でも不十分である。病気の結果や場所からの名前では足らないので，何かに似ていないか，どこか一つでも類似しているところはないか，類推して病名を付けなくてはならないのである。例えば，狼（腫瘍），蟹（潰瘍），蛸（ポリープ）などである。物と，その名前のどちらが多いかという問題は，病気以外のことについては難しい問題であるが，病気の場合は，物よりも名前の方が多いと容易に断定できるのではないか。たとえ，病気以外では人は死ぬことはない

と言って破壊を限定してみても，それでも人間は無限の危険に晒されることになる。さらに病気を限定して，熱の出ない病気はないとしてみても，それでも無限の危険がある。熱病の名前を一つ一つ挙げることは，先天的な記憶を悩まし苦しめ，後天的な記憶を混乱させ錯乱させる。そうであるから，私の病気が多くの病気の，多くの熱病のいずれに当るのか，どのような結果をそれは招こうとしているのか，どのような手段でそれに対抗すべきかを合議している医者達は，なんと複雑な仕事をしなければならないことであろうか。しかし，悪のなかにもある程度の善はあるものである。私の病気は医者の合議を許すものである。他の多くの病気の場合には，基となっている病気よりは，付随的な症状の方が激しいので，医者が本来の病気の治療は中断し(諦めることもある)，まず症状の治療から手をつけなくてはならないほどである。国家の場合も同様ではないか。重要な地位にある人達が傲慢で国民が騒ぐことが時々あるが，その時の重大な病気，王にとって最も危険な病気は，重職にある人達の傲慢である。しかし，戒厳令が敷かれ，国民が処罰されることがある。国民の騒乱は本来の病気の付随的な症状であるが，あまり激しくなると，合議の余裕もなくなるのである。我々の心の病の付随的な症状の場合も同様ではないか。我々の感情や激情の場合には同様であることは明白である。激怒した人がまさに襲いかかろうとしているとき，彼の肝臓を直そうとするべきか，それとも，彼の一撃を挫こうとするべきか，いずれであろうか。しかし，相談をする余地のある時は，それほど事態は差し迫っていないのである。いま医者たちは相談をしている。何事も軽率に，不注意に行わないためである。そうして，彼等は処方箋を書く。何事もこっそりと偽装して，無責任に行わないためである。肉体的な病気の場合に，いつもこのように事が運ぶわけではない。医者が病室に入るや否や，患者の腕にメスをたてることもある。一刻も血抜きを遅らせたり，他の薬を投与したりするのを，病気が許さないからである。国家や，政治においても，同様な場合がある。すなわち，突発的な事態が生じて，為政者が法律に従って何を為し得るかを問わずに，その場で必然的に為すべきことを行うことがある。しかし，我々が書かれたもの

に依存することが許され，全ての手続きが明々白々と，公明正大に行われる時には，不幸中の幸いであり，希望と慰めがあると言わねばなるまい。何故なら，そのような場合は，満足と同意が伴うからである。私の自己解剖の結果を得た医者たちは相談して，その結果投薬し，適切で妥当な薬を投与する。もし，医者たちが私の部屋に帰って，私の病気を招来し誘発させた，或るいは，それを促し悪化させた，私の悪癖を叱るようなことがあれば，また，もし，病気が直ったらこのような食事と運動をせよと，規則を書き与えるようなことがあれば，それは投薬することではなく，診断を繰り上げたり，繰り下げたりすることである。死刑の宣告を受けた者に，こうしておれば命は助かったのにとか，もし助命されらこういう生き方をするのが良いとか言うことは，彼を救うと言うよりも，彼を悩ますことである。私は医者たちが事態を知っているのを喜ぶ（私は彼等に何事も隠さなかった)。私は彼等が相談をするのを喜ぶ(彼等はお互いに何事も隠そうとはしない)。私は彼等が書くのを喜ぶ(彼等は何事も世間から隠そうとはしない)。私は彼等が薬の処方箋を書くのを喜ぶ。私の病気にはそれを直す薬があるのである。

論　議 IX

私の神よ，私の神よ，あなたが神であると言われたほどの高い位についた人たちのなかには，あなたよりも自分のほうが上だと思ったような者もあり，その傲慢に対して私が正当な怒りを感じ，神聖な嫌悪を覚えることは許されるでしょう。アラゴンの王であったアルフォンソは，[191]天体の運動に精通していたので，大胆にも，神が天体を創造するとき相談を受けていたならば，天体は現在よりも優れた秩序を与えられたであろうと言っている。あなたの予言者の非難に耐えることができずに，腹を立てたアマツヤ王は，「お前を王の顧問にした覚えはない」と言った。[192]あなたの予言者イザヤは，「主の霊に命じる者があろうか，顧問として主を教え得る者があ

ろうか」[193]と言っているが，それは，あなたの御子にそのような役割を与え，認めた後のことである。すなわち，あなたの御子だけには，「力ある神，平和の君」という偉大な呼び名に加えて，「驚くべき顧問」という呼び名を与え，[194]また，あなたの御子を「知恵と力の霊」とも呼んでいるのである。[195]そうであるから，ああ神よ，あなたは人の相談はお受けにならないが，何事も相談なしに人に対して実行されることはないのである。人を創造された時にも，「人を造ろう」と言ってあなたは相談された。[196]人を救われる時にも，ああ，「偉大な人の救い主よ」，[197]あなたは相談して事を運ばれる。何故なら，あなたの全ての外的な御業は，三位一体の相談に基ずくものであり，三人の手になるものである。そうであれば，この瞬間に三位一体の祝福と栄光にあふれた三人の合議が行われていると，私は信じるべきであろう。あなたが，この病にかかった私の身体と，この腐敗した私の魂に対して，何を行うべきか合議しているあいだ，私の魂はあなたの決定を，罪に慄きつつ，しかし，心安らかに，待っているのである。私は私の身体について相談している医者たちに，私の意見を述べるのではなく，私の病状を明らかにし，私の身体の解剖を見せる。それと同じように，ああ，私の神よ，私はあなたの前に私の魂を開いて見せ，謙虚な気持ちで，私の全ての静脈のなかにはあなたの御子の血が流れているが，私は様々な罪をしばしば繰り返しては御子を何度も磔刑にしたことを，私の全ての動脈のなかには「惑わす霊」「淫行の霊」「迷わす霊」が宿っていることを，[198]私の全ての骨は罪の習慣により硬化し，罪の髄がそれを養い柔軟性を与えていることを，私の全ての筋肉，全ての靭帯は罪と罪とを結び合わすものであることを告白する。しかし，ああ，祝福と栄光にあふれた三位一体よ，神聖にして完全である集いよ，しかもなお一人の医者よ，もしあなたがこの私の告白を聞いて合議して下さるのであれば，私の病状は絶望的ではなく，私の滅亡は決定的ではない。また，もしあなたの合議の結果が書き下ろされ，あなたが書いたものに私を委ねられるようであれば，あなたは私の回復を意図されているのである。ああ，私の神よ，何時も（常にあなたは不変であるから）あなたは書いたものを通して，公明に，明瞭に，隠しだてなく，

全てのことを運ばれる。あなたの最初の本である「命の書」は，あなたにとっては一度も閉じられたことはないが，我々にとっては一度も完全に開かれたことはない。あなたの第二の本である「自然の書」は，影のように朧げながらあなたの姿を宿している。あなたの第三の本は聖書であるが，まずあなたは旧約に全てを書き留められ，次いで，それを読むために新約という灯火を与えられた。それに加えて，あなたの委任した人々の制定した正当で有益な立法の書，さらに，その手引きとなる懐や胸にも入る我々の良心の書をあなたは与えられた。その上，我々の罪を一つ一つ書き留めた様々な書物，さらに，屠られた小羊だけが開くのにふさわしい七つの封印をもった書物まで，あなたは与えられたのである。[199]この書物を小羊の血に清められた者たちの許しと，彼等の義を宣言したものとして解釈することは，私の祝福された聖霊の意に反することではないと願っている。そして，もし，あなたがこれらの書に照らして私を新たに聴聞し，これらの書に照らして新しく裁かれるのであれば，私の熱病は片手の火傷ほどのものに過ぎない。私はまだ救われるのである。たとえ私の本，私自身の良心によって，或るいは，その他の本によって救われなくても，あなたの第一の本である「命の書」，私があなたによって選ばれた者であることを示す書によって，また，あなたの最後の本である「小羊の書」と，彼の血による贖によって，私は救われるのである。もし，いまだに私のために合議が行われているのであれば，私は見捨てられたのではない。もし，これらの本に委ねられるようであれば，私は見捨てられることはないはずである。何故なら，これらの本（特に聖書）には，ある人達が毒に変えてしまうようなことが書いてあるけれども，合議を通して（私の告白を聞き，各々の出来事を考慮に入れて），あなたは全てを薬として用いられるからである。悔い改めない者たちが絶望を読み取るような文章からも，進んで悔い改める者は，あなたの恵みの朝露，あなたの時を得た憐れみ，あなたの積極的な慰めを受けることができるであろう。

祈　禱 IX

ああ，永遠の最も恵み深い神よ，あなたは澄みきった目であるから，罪を見ることはできない。我々は汚れた体質をもっているから，罪以外のものを見せることはできない。だから我々は，当然の事ながら，あなたが永遠に我々から目をそらしてしまうのではないかと恐れる。しかし，我々が自分の苦しみには耐えることができなくても，あなたの苦しみには耐えられるように，あなたは我々の罪には耐えることができないが，あなたの御子の罪には耐えることができる。だから，御子はあなたを怒らせるような我々の罪をすべて担い，我々に代わってあなたに見せたのである。自然には，瞬間的に見たものを殺す蛇の目はあるが，我々が見ている間に我々を養ってくれるような目は存在しない。ああ，主よ，あなたの目はそのような目だ。どうか苦しみのなかにある私にあなたの目を向けて，私を黄泉の国の境から呼び戻して下さい。どうか私にあなたの目を向けて，私を精神的な死から救って下さい。私は罪のうちに私を生み落とした両親から精神的な死を与えられ，その土台，すなわち，原罪の根底の上に，多くの罪を山のように積み重ねることにより，地獄へ行くように定められている。しかし，ああ，祝福と栄光にあふれた三位一体よ，どうか私のためにもう一度合議を開いて下さい。そして，父なる神は創造の時に与えられた神の姿を私が汚してしまったことを知っておられ，御子は贖罪に対して私が興味を示さなかったことを知っておられるけれども，ああ，祝福にあふれた聖霊よ，私の良心に証しをするように神と御子に証しをたて，この瞬間に私は今まで何度も何度もかたくなに拒んできたあなたの聖なる霊感を受け入れ，私の弱った肉体が毛穴を通して汗の涙を流す以上に，私の悲しい魂は，神の怒りのもたらす苦しみよりも，神の怒りそのものの故に，血の涙を流していると告げて下さい。ああ，祝福と栄光にあふれた三位一体よ，どうか私のためにもう一度合議を開いて，私に薬を与えて下さい。たとえそれが長い間病の苦しみのなかにこの魂を保つことであろうと，もしそれがあなたの手によって与えられるものであれば，それは薬である。また，たと

えそれがこの魂の即座の旅立ちであっても，もしそれをあなたの手から受けるのであれば，それは薬である。

X　蛇行する病気と慌てずに戦う

医者は病気が徐々に進行するのを見て，おもむろに治療を始める

黙　想 X

これはまさに自然の重ね箱である。天は地を宿し，地は町を宿し，町は人を宿す。しかも，これらは全て同心的であり，それらに共通な中心は破壊，滅亡である。これらのものと中心を異にする唯一のものは，造られたことのないもの，すなわち，我々が想像する事はできても明示する事ができない，あの場所，あの外衣，だけである。それは神の光から流出した光であり，聖者はそのなかに住み，それを衣としてまとっている。それだけが滅亡という中心に従わない。何物からも造られたことのないものだけが，滅亡の恐れを持たないのである。他の全てのものは，天使も，我々の魂も，同じ軸の上を回転し，同じ中心に従っているのである。それらのものは全て，神に救われて不滅のものとされない限り，その性質によって滅亡という中心に向かって落ちて行く。また，これら全てのものに於て（天体の構成する宇宙，地上に存在する国家，国家を形成する人間，それで全てが包含される），最も識別し難いものが，最も大きな災害をもたらすものである。その作用に於て最も目立たないものが，最も目立つた結果を招くのである。天体が水腫にかかると，地球は溺れ，天体が熱病にかかると，地球は火傷を負う。水腫，すなわち，洪水については，それが起こる百二十年前に，此の世はその予知を得た。[200]それ故に少数の者たちは，それに対する用意をして救われた。しかし，熱病は瞬間的に起こり，全てを焼き尽くすであろう。洪水は天から落ちて来たが，天に被害を与えたわけではない。それ

は天の光を消さず，その熱を奪わなかった。しかし，熱病，すなわち，火はその炉を焼いて，火を吐く天を破壊するものである。天狼星は毒を吐き，有害な気を発する。しかし，我々はその星が何時天に昇るか知っていて，着物を着たり，食養生をしたりして，被害を受けないように身を守るのである。ところが，彗星や流星は，その作用や意味を解釈したり，防いだりすることのできる者もいないし，その到来を予測できる者もいない。どんな暦にも何時流星が出るか書いてない。それは天の秘密である。どんな星占いも流星の作用が何時及ぶか言えない。それはさらに一段と高い次元の秘密である。そうして，最も秘密であるものが，最も危険なのである。人の社会に於ても，国家に於ても，連邦に於ても，それは同じことである。反乱軍の二十の太鼓よりも，数人の秘話する者や，隅でひそひそと陰謀を巡らす者の方が，危険な音をたてるのである。大砲よりも，壁の下に埋めた地雷の方が，壁に大きな損害を与える。脅威を与える千人の敵よりも，何も言わないように誓いを立てた数人の者の方が，恐ろしいのである。荒れ野に於て，[201]また，その後も，神は人々の重罪を幾つも経験されてきたが，常に人々の心に宿る「不平・不満」[202]を責められる。それは神の公然と明示された意思に密かに背き，逆らうことだからである。それは最も恐ろしい，最も致命的な，罪なのである。肉体の病気の場合も全く同様であり，まさにそれが私の病気の場合である。脈も，尿も，汗も，何一つ明白にしないことを誓っている。いかなる危険な病の兆候もみせないのである。私の活動力が衰えたのではない。体力の衰退はみられない。食事が喉を通らないわけではない。食欲の減退はみられない。私の思考力が侵され，損なわれたわけではない。私の悟性を惑わす錯覚はない。それなのに，私の病が見えないところで進行しているのを医者は見抜き，いつの間にか悪化しているのを，私も感じるのである。病気は私の体内に一つの王国，帝国を築き，国家の機密を口実に勢力を伸ばして，公言しようとはしないのである。しかし，国家に於けるこのような秘密の謀事に対して，行政の任にある者は拷問を用いることができる。同様に，いつの間にか進行する病気に対して，医者は検査をすることができる。私の医者はまさにそのような手

段を用いようとしているのである。

議　論 X

私の神よ，私の神よ，私は次のような話を聞いている。それはあなたの僕であるナジアンズスの聖グレゴリーが伝えたものであるが，[203]それによると，彼の妹は熱心に祈るあまり，神聖な執拗さで，信心深い厚かましさで，あなたを脅迫したそうである。ああ，神よ，私はその真似をするつもりはないが，アダムが罪を犯さなければ，キリストは死なずにすんだのにと願ったアウグスティヌスにならい，[204]イヴを誘惑するまでは，蛇が立って歩き，口をきくことが出来たのであれば，[205]今もそうであって欲しいと願うことは許されるであろう。何故ならば，蛇が口をきけば，それだけ早く私は彼を耳で聞き，蛇が立って歩けば，それだけ早く私は彼を目で見付けることが出来るからである。蛇の呪いによって，私も呪われている。彼は這い上がって私を滅ぼすからだ。なるほど彼はまず足から始め，それを傷つけるだけであるが，彼と，彼に宿る死は，「窓に這い上がり」[206]我々の魂の門戸・入口である目や耳に侵入する。彼はこっそりと我々に働きかけるので，我々はそれに気付かない。彼の力量の一つは，彼と同様に，こっそりと，他の人が気付かないように，我々に罪を犯させることである。しかし，彼の才覚は，こっそりと，我々自身も気付かないように，我々に罪を犯させることである。さて，第一の目的，すなわち，我々が他人に自分の罪を隠すようにするために，彼はもともと彼の子供である嘘を誘い込んだ。[207]人間は自然のなかに存在するが，真心と気高さの火種を宿しているから，悪事を隠すため以外に嘘をつく筈はない。肉体，すなわち，罪は蛇のものである。そして，それを隠す上衣である嘘も彼のものである。これらは彼のものであるが，自分の罪を自分に隠すということは，正に彼そのものである。蛇の毒牙に刺されたとき我々が良心の針で自分を刺さなければ，罪の毒だけを持ち罪を悔いる心を持たなければ，あなたの祝福された

御子がユダを指して「一人は悪魔だ」と言われたように,[208]すなわち，彼は悪魔を宿していたのではなく，悪魔そのものであったのであるが，それとまったく同様に，我々も自分に対して悪魔になってしまう。すなわち，胸に蛇を宿しているだけではなく，我々は自分をだます蛇になってしまうのである。あなたの僕であるダビデは,「隠れた罪からどうかわたしを清めてください」と祈ったが,[209]どこまであなたの許しに迫ることができたであろうか。隠れた罪などというものが果たしてあるのだろうか。あなたの予言者の一人は,我々は普通我々の罪を寝床の上でたくらむと言っているが,同時に，夜明けとともにそれを行うとも言っている。[210]我々の罪のなかには，我々がそれを行うのを誉れとし，人に知られなければ行わないようなものもある。あなたの祝福された僕であるアウグスティヌスは，彼の頑固な羞恥心と，傷つき易い良心を恥ずかしく思ったと告白し，更に，罪深い仲間に嫌われないように，犯したこともない罪まで犯したように嘘をついたと告白している。[211]しかし，たとえ我々が罪を隠そうとしても，(あるあなたの予言者は，そのような願望をもち，それを実行した人を知っていたから,「お前は平然と悪事をし,『見ている者はない』と言っていた」[212]と述べている)，果たして罪を隠すことは可能であろうか。ああ，神よ，あなたは他の人を通して罪を知ることもできる。アベルの血はカインの人殺しをあなたに告げた。[213]天もあなたに告げることができる。「天は彼の罪を暴く」と書いてある。[214]小さな生物だって告げることができる。「空の鳥がその声を伝え，その言葉を告げる」と書いてある。[215]実に，あなたは告げ口をする者を煩わす必要がないのである。あなたはアダムの罪を自ら暴かれた。[216]罪はあなたにとって明白であるから，あなたは「一切の業を，隠れたこともすべて，裁きの座に引き出される」のである。[217]また，「隠されているもので，知られずに済むものはない」のである。[218]ああ，しかし，私の神よ，あなたが私の罪を知られるもう一つの方法があり，あなたはそれを最も好まれる。すなわち，私の告白を通して私の罪を知られるのである。薬のなかには，特定の体液を引き寄せ，集められた体液がその重みに耐えかねて流出する作用をするものがあるが，同様に，あなたの霊が私の記憶に

昔の罪を引き寄せて，心に甦った罪が流れ出るのが告白である。あなたの僕であるダビデは，「黙し続けた時には，昼も夜もあなたの御手はわたしの上に重く，罪を告白した時には，あなたはわたしの罪と過ちを赦して下さいました」と言っている。[219]あなたは告白の目的を熟知しておられるから，告白の後に更に新たな恵みは殆ど必要なくなるのである。しかし，あなたはなお二つ恵みを残しておられる。すなわち，告白した罪に我々が再び陥らないような恵みと，あなたの僕であるアウグスティヌスが，「あなたは私が犯した罪と，あなたの恵みによってのみ犯さずに済んだ罪とを許された」と言ったとき，[220]彼が理解していたような恵みである。あなたの恵みにより我々が犯さなっかった罪も，性癖においては我々が犯したものであり，その性癖にはあなたの恵みが必要なのである。そのような恵みを彼は許しと呼んでいる。これらは最も隠れた罪である。それは実行されなかったものであり，他人は勿論のこと，私も知らないものである。しかし，あなただけは知っておられる。ああ，あなたの恵みにより，なんと度々，なんと大きな罪から私は逃れたことか。あなたの恵みがなければ，私はなんと多くの罪を，あなたに対して繰り返して来たことであろうか。

祈　禱　X

ああ，永遠の最も恵み深い神よ，あなたはイエス・キリストとして，全てのことを知っておられながら，審判の日については，「その時は，だれも知らない」と言われた。[221]それは，私達にいつその日が来るか告げることはできないという意味である。それと同様に，あなたは私の全ての罪を知っておられるが，私を慰めるために，私があなたに告白するのでなければ，私の罪は知らないと言われる。だが，どうして私は私の知らない罪をあなたに告げたら良いのであろうか。もし，私が原罪を犯しましたと言えば，あなたは原罪とは何か知っているかと問われるであろうか。私は他の人達を満足させるほど原罪について知っているわけではないが，自分を断罪し，

あなたに許しを乞うぐらいのことは知っている。もし，私が若い頃の罪を告白したら，あなたはどんな罪を犯したか知っているかと問われるであろうか。私は自分の犯した罪をよく知らない。それを全部言うことも，またそうするだけの時間も与えられていない。(何故なら，いま口で言うことができるよりも速く私は罪を犯したのであり，私のしたこと全てが罪を誘発したからである)。しかし，私はあなたの恵みを除いて私の罪に匹敵するものはないほど，無限の罪を重ねてきたことは知っている。罪の名前を全部挙げても——思想や，言葉や，行為の罪，不履行の罪と履行した罪，あなたに対して，隣人に対して，私自身に対して行った罪，悔い改めることのなかった罪，悔い改めても再び陥った罪，無知ゆえの罪，良心の声に背き，あなたの戒めに背き，あなたの御子の祈りに背いた罪，我々の教義を破り，教会の定めを破り，あなたが私を置いて下さった国家の法律を破った罪——これらの罪を全部挙げても，私の罪には及ばないのであれば，何をしたら良いのか，私には分かっている。ああ，神様，どうか私をお許し下さい。私のためにこれら全ての罪をお許し下さい。あなたの御子イエス・キリストは此の世の全ての罪を負われたのであるから，これら全ての罪も彼が負われたものである。これらの罪のなかには，あなたが私の神でなかったならば，また，恵みによって予防することにより，前もって許しを与えられていなかったならば，私が犯さなかったようなものは何一つないのである。その性質上，罪は常にその著者の姿を残すものである。従って，罪は絶えず我々の魂に忍び込み，誘惑する蛇に他ならない。どうか，あなたの青銅の蛇（私のために十字架についたあなたの御子の凝視すべき姿）が，最初の蛇の毒牙から受けた私の傷を癒すために，消えることなく私の目前に置かれているようにして下さい。獅子には獅子を，すなわち，誰かを食いつくそうと漁り回る獅子に対しては，ユダの一族からでた獅子をもっているように，[222]蛇には蛇を，すなわち，悪意の蛇に対しては，知恵の蛇をもつことができるようにして下さい。そうして，あの獅子の，あの蛇の，恐ろしい，悪賢い，誘惑に対しては，あなたの箱船に乗り，あなたのオリーブをくわえたあなたの鳩をもち，[223]あなたの教会の定めるところに従い，

謙譲と，平和と，和解を，あなたに対してもつことができるようにして下さい。

〔注〕

主に原書の側注をもとに，聖書の出典をを示す。側注でないものには（＊）印を付す。聖書は「新共同訳」を用い，詩編については側注と番号が異なる場合は括弧で示す。

104. サム下　3：11
105. ヨブ　9：34（34～35）
106. ルカ　18：5
107. ルカ　18：1
108. ルカ　11：5
109. 詩　27：1
110. 民　14：9
111. 詩　34：10（11）
112. 詩　49：5（6）
113. シラ　41：3
114. マコ　6：20
115. 詩　25：14
116. 箴　2：5
117. 使　9：31
118. 創　3：10
119. 箴　1：26，10：24
120. 詩　53：5（6），14：5
121. ヨハ　7：12～13
122. ヨハ　19：38
123. ヨハ　20：19
124. イザ　33：6
125. マタ　8：26
126. 士　7：3
127. 黙　21：8
128. ヨブ　6：20
129. マタ　28：8
130. レビ　19：14，25：17，
申　10：12他（＊）
131. マタ　22：37（＊）
132. 詩　111：10，箴　1：7
133. シラ　1：20
134. シラ　1：27
135. 申　4：10
136. ヘブ　11：7
137. シラ　18：27
138. ヘブ　10：31
139. 前367にシラクサの僭主となったディオニュシオス二世（＊）
140. ウィリアム一世は1087年にルーアンで没したが，家来たちは自領に逃げ帰ったという。（＊）
141. 「告白」XI，iii（＊）
142. サム下　18：25
143. 「我々の訳以外は，Buxdor 及び Schindler も含めて，全ての訳がそのように解釈している」とダンは側注している。
144. 2テモ　4：11
145. 出　18：14，21～22
146. 民　11：16
147. ヘブ　1：6
148. マタ　26：53

149. マタ　25：31
150. ルカ　2：11
151. ヨハ　20：12
152. 創　28：12
153. 詩　91：11
154. 創　19：15
155. 黙　1：20
156. 黙　8：2
157. マタ　13：39
158. ルカ　16：22
159. 黙　21：12
160. 王下　19：35
161. ルカ　4：18
162. エフェ　4：12
163. 1ペト　2：25
共同訳は「監督者」であるが，欽定訳の「主教」に従った。
164. ヨハ　20：22
165.「説教」XXVI, No. XI（＊）
166. 出　16：15, 知　16：20（＊）
167. 代下　28：11（＊）
168. 創　6：6（＊）
169. イザ　1：14（＊）
170. マコ　14：33（＊）
171. 王上　18：27（＊）
172. ギリシャ神話の医神（＊）
173.「護教論」への言及（＊）
174. シラ　13：23
175. アウグスティヌス：「神の国」V, xxi
176. マタ　22：20（＊）
177. 瘰癧は王の手が触れるとなおると 信じられていた。（＊）
178. ルイ九世は1297年に聖人の列に加えられ，ヘンリー一世の妻マティルダは癩病患者の世話をしたことで知られる。（＊）
179. テオドシウス一世の妻，プラキラはフラキラとも呼ばれた。（＊）
180. サム下　19：12（13），24：17
181. サム下　24：23
182. ヨハ　5：7（＊）
183. ルカ　11：11～12（＊）
184. 代下　19：8
185. 1コリ　13：12（＊）
186. 1コリ　3：6～7（＊）
187. マコ　13：26（＊）
188. マタ　25：20～21（＊）
189. サム下　24：12～13（＊）
190. ヨブ　1：16, 19（＊）
191. カスティーユ王が正しい。（＊）
192. 代下　25：16
193. イザ　40：13
194. イザ　9：6
195. イザ　11：2
196. 創　1：26
197. ヨブ　7：20　欽定訳は「偉大な人の救い主よ」であるが，共同訳は「人を見張っている方よ」となっている。
198. 1テモ　4：1, ホセ　4：12, イザ　19：14
199. 黙　5：9（5：1, 12）
200. 創　6：3（＊）
201. 出　16：2（＊）
202. 出　16：12（＊）
203. ナジアンズスのグレゴリー（329－389）はカッパドキア出身の教父で，その妹はゴルゴニアである。（＊）
204.「ペラギス人の二通の手紙に対す反論」IV, 6（＊）
205. ユダヤの歴史家ヨセフス（37～100頃）からの引用
206. エレ　9：21（20）
207. ヨハ　8：44

208. ヨハ　6：70
209. 詩　19：12（13）
210. ミカ　2：1（＊）
211.「告白」II, iii, 7（＊）
212. イザ　47：10
213. 創　4：10
214. ヨブ　20：27
215. コヘ　10：20
216. 創　3：8
217. コヘ　12：14
218. マタ　10：26
219. 詩　32：3～5
220.「告白」X, xxx, 41～42（＊）
221. マタ　24：36（＊）
222. 黙　5：5, 1ペト　5：8（＊）
223. 創　8：11（＊）